

流通の課題

⑧

かつて全国一のイ草産地だった岡山県。生産の中心だった倉敷市で、畳表や上敷きなどのイ草製品をはじめ、カーペットやインテリア類を扱うトクラの土倉修治社長(56)は「子どものころは見渡す限りイ草田が広がっていた」と昔を思い出す。

現在、市の南部は水島コンビナートの工場が立ち並び、中心部は住宅地。イ草は農家2戸が約1・5畝で栽培するだけ。イ草どころか農地すらほとんど見当たらない。

明治時代、岡山は染色したイ草で模様を織る「花ござ」を開発し、欧米に輸出して大きく経済発展した。しかし、イ草の作付けが5500畝とピークを迎えた1964年、水島を含む岡山県南地域は新産業都市の指定を受け、労働力が工場へ流出。

岡山のい業界



色鮮やかな花ござなどが並ぶトクラのショールーム
＝岡山県倉敷市

輸入、合併…中国に活路

農地は急速に宅地化された。イ草のない岡山でどう生き残るか。地元のい業界が出した一つの答えが中国だった。日中国交正常化が実現した72年、早くも中国政府とい草製品の輸入販売契約を結ぶ大手問屋が現れる。59年に八代に支店を開いていたトクラも85年から中国産畳表の輸入を始め、93年には中国寧波市に合併会社を設立した。

土倉社長は「既に一大産地だった。中国だと自分たちで投資して思うように開発できる。消費地の需要に応えるため、数量を確保できる」と探さなくてはならなかった」と説明する。

こうした岡山を含む流通業界の動きは、産地の八代で「安価な中国産にやられた」と激しい反発を買う。八代市鏡町にあるトクラ肥後支店長の中村昌三さん(42)は「農家の気持ちを考え、支店では中国産の畳表は扱わなかったが、10年ほど前、支店の門に中傷するヒラを張られたこともある」と振り返る。

同社が扱う製品は畳表や上敷きなどを合わせて8割が中国産、2割が国産という。土倉社長は「主力はホームセンターで販売する花ござや小物類。不況のため、国産より安い中国産がよく売れる。一方、国産も「安心・安全」ということで人気は根強い」と言う。

八代に限らず、目の敵にされた中国でもイ草生産は減り、市場全体の縮小に歯止めがかからない。中村さんは「八代の取扱量が減り、地元従業員の雇用を維持するため、一昨年から本社が担当していた中国産の畳表を支店で扱うようになった」と話した。

「イ草がこれだけ少なくなれば、八代と中国は共存を考えると、中国は人件費が高騰し、今後作付面積は減るだろう。国産がどこまで持ちこたえられるかだと思つた。中村さんはそうみる。

和紙畳、化学畳などの手こわライバルが登場してきた中で、国内外の「天然のイ草」が正念場を迎えている。

(長野希美)

岐路に立つイ草

第2部

2011.9.30